



TITLE:

<批評・紹介>原商 小島祐馬著

AUTHOR(S):

大島, 利一

---

CITATION:

大島, 利一. <批評・紹介>原商 小島祐馬著. 東洋史研究 1936, 2(1): 82-86

ISSUE DATE:

1936-10-13

URL:

<https://doi.org/10.14989/145567>

RIGHT:

つた。事大外交に訓練された朝鮮がこの間の機微を見脱す筈はなかつた。日本の用兵によつて最も甚大な損害を被つたものは言ふ迄もなく朝鮮ではあつたらうが、又よく日本用兵の威武を女真人間に放送して、後來永く女真人の心膽を脅かし、その已れに對する壓迫緩和に利用し成功したものも朝鮮であつた。かく見來るとき、我が秀吉の半島用兵は對外的に如何に莫大な影響を與へたか、同時に東洋に於ける日本の存在は如何に儼然たるものであつたかを了知するであらうと。

清朝を興したものは日本である、といふ著者の史論こそは、かくて、常の所謂春秋の筆法を以て目さる可きものとは遙に類を異にするを見る。

而して最後に著者は、かゝる冥々裡の歴史事象を透觀して、蓋し滿鮮一帯の民族は、われら日本とは凡そ同一系の血縁であつて、言語にも、風俗にも、將た文化的事象にも、相共通するものがあり、さういふ内容的のものであるまいかと結んでゐる。蓋し道破し得て妙である。

初めにも言ふが如く、著者の博き史學の中にも、特に清初史に於いてその精妙なるものがある。當事者たる秀

吉にも、又家康にも、更に其の後三百年の長き、今日に至るまで誰人によつても意識せられざりし重大な歴史事實が、著者の史眼に俟つて美事に道破せらるゝに到つたことを我々は祝福せずに居られない。而して又我々の最も大いなる安易さを以て本書に就き得る所以の一斑は、本書の總論的敘述が實に著者の幾多精緻なる研究の上に於いて始めて成るものであることを知るが故である。

尙史林第十九卷第二、三號誌上に掲載された浦廉一氏の「明末清初の鮮滿關係上に於ける日本の地位」なる一篇は多くの點に於いて稻葉博士の本著と所論を同じくするものがある。清初史研究論文中、又出色の力作であり、私は斯篇を顧るの遅かりしを遺憾とする。讀者の併讀せられんことを希望する。

(今 西 春 秋)

## 原 商

小 島 祐 馬 著

昭和十一年八月、東亞經濟研究二十週年記念號  
(二十卷三號)

山口高等商業學校内に東亞經濟研究會が創立され、その機關誌東亞經濟研究が創刊されたのは大正六年の事である。同

誌は歴史研究を主とするものでなく、東亞殊に支那現代の經濟事情の研究を目的とするものである。併し同誌に載録される論文の總てが東亞現代の經濟事情に關するものではなく、歴史關係の論文も少からず掲載され、大學を中心とする歴史關係の雜誌に伍して、立派な業績を擧げて來たのである。去る八月刊行の二十週年記念號を見るに從來幾多の優れた論稿を以て同誌を飾つた諸先生の論文を揃へて堂々たる内容である。その中特に歴史關係のものを擧げると、稻葉岩吉博士の「滿洲國の治安と匪賊の由來」矢野仁一博士の「正徳新例前の長崎の支那貿易と正徳新例事情」吉田虎雄氏の「兩漢の田租に就いて」橋本増吉氏の「支那古代の社稷について」西山榮久氏の「古代支那同姓不婚の研究」及びこゝにその内容の紹介を試みんとする小島祐馬博士の「原商」等がある。紹介に入るに先だち、同誌多年の努力に敬意を表し、更に斯學のため將來益々奮闘せられん事を希ふ次第である。

本論文の意圖する所は、最初に明かに記してあるように、商の原義を考へることによつて、商の起源を説明せんとするにある。先づ所論の概要を述べよう。

許慎の『說文解字』に、𠂔行賈也、从貝商省聲とあるが、周代の金文を見ると、𠂔又は賈はすべて今日の賞即ち賞賜の義で、行賈の意に用ひられたものはない。又同

じく『說文解字』には商の字があるが、その「從外知内」といふ解が如何にして發生するのか了解に苦しむ所であり、又章を以て商を解し、商を度と解する説は、所謂商の特徴たる「通四方之物」といふ點を捉へた言葉ではない。

甲骨文や金文や『詩』『書』等に見える商の字は地名又は國號として用ひられてゐる。之が商の字の用例として最も古いもので、たま／＼金文に賞の假借として用ひられてゐるのを除く外、甲骨文、金文を通じて商は地名又は國號以外には用ひられてゐない、と博士は商の原義は商業とは無關係で、必ず殷商の商たるべき事を文字學上より考證され、次にこの商の遺民即ち商人と商業との關係に論を進める。

周の時代になつて、殷の後たる宋を商と稱し、宋人を商人と稱した。尤も殷の遺民は周の征服後すべて宋國にのみ局限されたものではない。勿論其大多數は宗國宋に定住したのであらうが、同時に他の諸侯の國に居たものも少くなかつた。之等諸侯の國に散在せる殷の遺民をも支配的地位に居る周人から區別して、商人と呼び習はしたであらうことは想像に難くない。この商人即ち殷の遺

民の中から、所謂行商が發生したのである。(これ博士の玆に言はんとする眼目である)『左傳』昭公十六年に鄭の商人に關する次の一節がある。

宣子有環、其一在鄭商、宣子謁諸鄭伯、子產不與、……韓子買諸賈人、既成賈矣、商人曰、必告君大夫、韓子請諸子產曰、日起請夫環、執政弗義、弗敢復也、今賈諸商人、商人曰、必以聞、敢以爲請、子產對曰、昔我先君桓公與商人皆出於周、庸次比耦、以艾殺此地、斬之蓬蒿藜藿、而共處之、世有盟誓、以相信也、曰爾無我叛、我無強賈、毋或勾奪、爾有利市寶賄、我勿與知、恃此實誓、故能相保、以至於今、今吾子以好來辱、而謂敝邑強奪商人、是教敝邑背盟誓也、母乃不可乎、

こゝの文意から推して、その周より鄭に來たといふ商人が一二人の商賈を指すものとは受取れない。恐らく商人の族と解すべきものであらう。同じく『左傳』の僖公三十三年の下には鄭の商人弦高の事を記して、

秦師過周北門、……及滑、鄭商人弦高、將市於周、過之、以乘韋先牛十二犒師、

とある。これ桓公以來盟誓ありと言はれてゐる鄭の商人

の一族に相違ない。又『莊子』を見ると、

宋人資章甫而適諸越、越人斷髮文身無所用之(逍遙遊)といふ一節あり、これは勿論寓言なるも、この寓言も殷の遺民が行商を爲すといふ一般の習俗に本づいて出來た比喩である。又『詩』の衛風に次の如き詩が載つてゐる。

氓之蚩々、抱布貿絲、匪來貿絲、來即我謀、送子涉淇、至于頓丘、匪我愆期、子無良媒、將子無怒、秋以爲期

(氓)

之を見ると衛の國では養蠶期に商賈が各戸に就いて絲を買つて廻つてゐる習俗が想見されるが、こゝに謂ふ所の氓とは、本來「亡民」の意ではないかと思ふ。即ち國を亡くした前朝の遺民の意であつて、『詩』の場合は殷の遺民即ち商人を指すものと思ふ。かくて博士は「以上の數例から見て殷の遺民即ち商人が支那に於ける行商の元祖であり、少くともその代表的のものであつたことは想見出来るのではあるまいか。想ふに彼等は周代經濟狀態の變化に伴ひ、且は彼等の社會上に於ける特殊の地位を利用して、行商を業とするに至つたもので、その行商人をば最初其國籍によつて商人の名を以て呼んでゐたものが遂に商人といへば行商人を意味することゝなり、更にそ

れが轉じて行商と坐賣とを問はずすべて交換の媒介を爲すものと呼ぶ名稱となつたのではあるまいか。尤も交換媒介の業は必ずしも周代に始まつたものでもあるまい。また行商人が獨り殷の遺民に限つたものでもあるまいが、殷の遺民の行商が行商として當時代表的のものであり、交換媒介の業は行商によつて始めて顯著となつた爲めに商の名が遂に支配的のものとなつたものと思はれる」と商人と商業との關係を明瞭にされ、最後に春秋から戰國に至る商業の發達期に於いて、一般人よりは優つた智能を有し、土地に結びつけられることの最も少く、且時としては征服者から農業生産手段を奪はれることもあつたであらう所の殷の遺民就中諸侯の國に散在してゐた遺民どもが西歐中世に於ける放浪の猶太人の如き役割をつとめて、當時の商業の發達に貢獻する所があつたとするならば、それは甚だ興味ある經濟史上の一事實であると言はねばならぬと結ばれてゐる。

以上は博士所論の梗概を叙したものであるが、近刊の燕京學報第十九期所載の陳夢家氏の『古文字中之商周祭祀』を讀むに、その緒論に於て商周民族の異同に關する徐仲舒氏の説を批判してゐる。徐仲舒氏の説といふのは

清華學校刊國學論叢一卷一號(民國十六年六月)所載の『從古書中推測之殷周民族』で、その説く所は

周公遷殷民於成周、成周居四方之中、可耕之土田少、又壓迫於異族之下、力耕不足資生存、故多轉而爲商賈、商賈之名、疑卽由殷民而起、

と言ひて、先きに引用せし左傳昭公十六年の鄭の子產の言を引き「此商人若爲商賈而非殷人之後、則左傳此言、卽不可通、云々」と述べてをり、その説殆んど上述博士所説の一部と合致するものである。これに對する陳夢家氏批判の全文を挙げよう。

商事之起、爲一切民族生活上自然之發展、不必創始于一民族、此猶漁牧耕作行于世界各族也。金文商字假作賞、易字假作錫賜、故「商」「易」卽「賞」「賜」。商業交易之商、蓋假爲賞字、原始物物交易、皆以實物互換、其事類于互賞互賜、故謂之「商」賞「易」賜也。

商事之起、或者發生于殷周之際、若必持商人爲商之說未免望文生義矣。

即ち物々交換の事が互に賞賜し合ふことも見られるといふその事の類似から、物々交換をも賞と稱したとするものである。

さて最後にこれ等の所説を讀んで私の思ふ所を述べて見よう。商の原義に關する博士の説に従ふならば、そこには尙行賈としての商が成立する以前の物々交換は何と呼ばれてゐたかといふ問題を殘すことになるのではないかと思ふ。行賈が物々交換を合理化する爲めに、貨幣の發生と共に物々交換から發展したものであるとするならば、その間には言語上にも何等かの關係があつたかも知れない。かくて陳夢家氏の如く物々交換を賞と稱したとする説も亦棄て難い。されば、初め物々交換を賞と稱する事あり、行商が起るに及んで之をも賞と稱したが、之を爲すものは主として商人と稱せられし殷の亡民でありなほ商は金文に於て賞の假借として用ひられてゐるよう

に、其の音同じきを以て、後商が行はれ、賞は廢せられたものではないかと思ふ。この論いさゝか二元論的不明快さあるを免れないが、かく見るならば金文に見える賞の如きは賞・商の中間的なものとして尙示唆に富むものと言へようかと思ふ。

この商の原義論を暫く措くならば、商人行商なる歴史的事實に關する博士の所説は誠に卓論と稱すべく、敬服に耐へぬ所である。更にまた其の思惟の仕方について後學の學ぶべきもの多きを思ふのである。尙陳夢家氏の前掲論文は卜辭・金文中の商周の祭祀に就いて精細に研究

せる六十五頁にわたる力作である。併せて同好の士に一讀をお薦めしたい。  
(大島利一)

## 遼海叢書

金毓黻編

自昭和九年八月至十一年三月、遼海書社編纂、大連  
右文閣發賣十集一百冊。

靜庵金毓黻氏編む所の遼海叢書は一昨秋第一集を出してより以來、刊行の業日を逐うて進み今春第十集を出して完結を告げた。毎集十冊、共に一百冊、收録する所は實に八十三種の多きに上つてゐる。我が國に在つて滿蒙に關する訪古の史料を蒐めたものとしてはさきに内藤湖南博士の滿蒙叢書が發刊せられたが、事業半ばにして中止せられ、遂にその完成を見るに至らず、學徒のひとつく憾みとする所となつてゐた。該叢書の上梓は實に我が國に於て中絶してゐた滿蒙叢書の刊行が、友邦の學者の手によつてひきつがれたものとも考へられて欣びに堪へない次第である。この叢書編纂の方針を述べて金氏は、凡そ一地方の叢書を刻するには必ず一地方を以て範圍と爲すのが定例となつてゐるが、吾が遼海叢書に在つては則ち然らず、專著(遼海先正の著述)、雜誌(作者は遼海